

# 明治初期における英語カタカナ表記の発音について ——『密都爾（ミッチェル）氏地理書直譯』の「例言」から——

今 井 典 子

## はじめに

明治初期、わが国において学校の英学の教科書としてよく採用されたものの一つに『ミッチェル氏地理書』<sup>1</sup>がある。アメリカの地理学者ミッチェルが著したものであり、明治5（1872）年に、その直訳本が『密都爾氏地理書直譯』（上・中・下3分冊で構成）（写真1参照）として出版されている。讃井逸三と川村秀二の合訳であり、訳者の序、および凡例として「例言」が掲載されている<sup>2</sup>。その「例言」には、英語の発音方法、および単語の読み方がいくつかの例を挙げカタカナ表記でなされている。

本論文は、『ミッチェル氏地理書』の我が国における教科書としての位置づけ、そして『密都爾氏地理書直譯上』にある「例言」の記載事項を当時の英学書および日本古来の五十韻と比較することにより、当時の英語に振られたカタカナ表記の音が現在と同じであったのかを検証することを目的とする。



写真1 『密都爾氏地理書直譯上』表紙（筆者蔵）

## 1. 『ミッチェル氏地理書』について

### 1.1. ミッチェルの経歴および著作について

著者である Samuel Augustus Mitchell はアメリカの地理学者で、1792年にコネチカット州ブリストルで生まれ、1868年12月20日にフィラデルフィアで亡くなっている。当初、学校で地理の教師をしていたが、教材に物足りなさを感じるようになり、その後、自らが地理の教科書や地図の出版者に転じる。ミッチェルの出版社は1826年から60年以

©高知大学人文学部国際社会コミュニケーション学科

<sup>1</sup> 1.1で取り上げる *Mitchell's New Primary Geography* か *Mitchell's New School Geography* を、あるいは両者の総称のことである。

<sup>2</sup> 「例言」の中の壬申晩夏という記載により、明治5（1872）年の発行であると考えられる。

上の間、合衆国において優れた地図、地理書を数種発行する。ミッチェルは、1860年頃に引退し、その後は息子の Samuel Augustus Mitchell, Jr. が家業を継いでいる。その息子は、精力的に地図の製作にあたり、ミッチェルの地図帳は1886年まで発行された<sup>3</sup>。ミッチェルが作成した地理書はシリーズとして刊行され、最初に *First Lessons in Geography*、次に小学生を対象とした *Mitchell's New Primary Geography*、中学生程度 of the *Mitchell's New School Geography* や *Mitchell's Ancient Geography* などがある。

『密都爾氏地理書直譯 上』には、冒頭に「新(ニュー)初学(プリマレ)地理書(ジ#アグラヒ#)」とあり(写真2参照)、これは *Mitchell's New Primary Geography* のことである。明治22(1889)年に岡島幸次郎は *Mitchell's New Primary Geography* の翻刻版を発行している(写真3参照)。そしてその奥付には『ミッチェル氏中地理書』とある<sup>4</sup>。

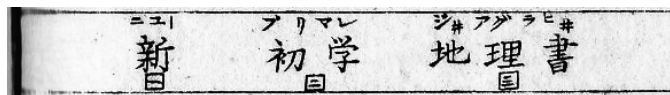


写真2 『密都爾氏地理書直譯 上』(一丁)

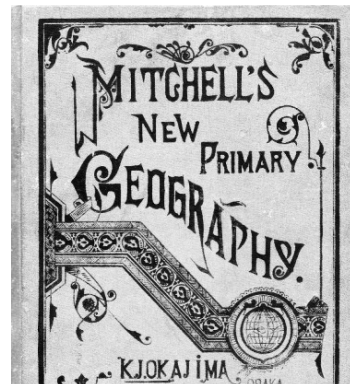


写真3 *Mitchell's New Primary Geography* の翻刻版(岡島, 1889)(筆者蔵)

## 1. 2. 『ミッチェル氏地理書』の教科書としての位置づけ

明治初期の世界地理や世界史の教科書は、洋書の原書が中心であり、当時の日本では、欧米に追いつくために、そして、欧米の思想を急速に吸収するためには必要であった。また、それらは英学の授業のテキストとしても使用され、*Mitchell's New Primary Geography* 以外にも、*Peter Parley's Universal History on the Basis of Geography* (『パーレーの万国史』)と *Mitchell's New School Geography* (『ミッチェルの万国地理』)が、よく取り上げられていた(大村 他, 1980, pp. 17-9)。これらは、福沢諭吉の影響が大きいと考えられる。福沢が創設した慶応義塾の卒業生が、全国に教師として派遣され、そこで、福沢から習った教科書をそのまま使用したためである。日本の英学100年編集部(1968, p. 363)によると、初期慶応義塾教科書表には、『ミッチェル氏地理書』

<sup>3</sup> Past Present Gallery (<http://www.pastpresent.com/storofmitmap.html> “The Story of Mitchell Maps”) (2013. 12. 29入手)

<sup>4</sup> 大村 他(1980, p. 19)によると、『ミッチェル小地理書』という記載である。

という記載があり、写真入りで紹介されている(写真4参照)。挿入されている‘City of Amsterdam’の挿絵は、筆者所有の *Mitchell's New Primary Geography* の翻刻版(岡島, 1889, p. 69)の挿絵(写真5参照)と同じものであるが、記載事項が異なるため、この初期慶応義塾教科書表にある『ミッチェル氏地理書』は *Mitchell's New School Geography* のことであると推測できる。

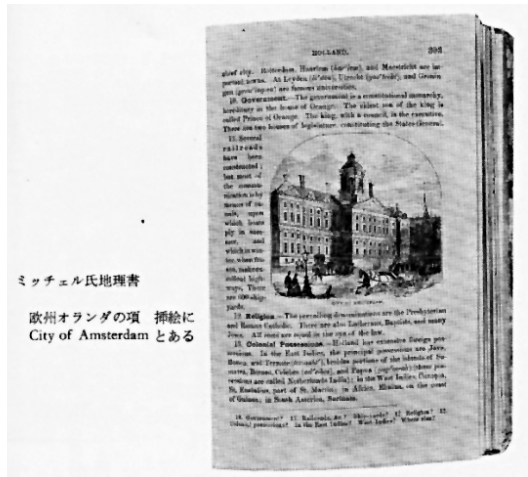


写真4 『日本の英学100年 明治編』より



写真5 *Mitchell's New Primary Geography* の翻刻版(岡島, 1889, p. 69)より(筆者蔵)

福沢は慶応3(1867)年に渡米した際、ニューヨークのアップルトン社で大量の書籍を購入している。その費用を仙台藩と和歌山藩からの預かり金と自己資金で充てており、仙台藩に報告用として渡した目録『藩養学養賢堂蔵洋書目録』の中には、同書は含まれていない(金子, 1979)。

高知の藩校においても、慶応義塾の卒業生が英語教師として派遣されている。この時期、塚原周造や高知藩人であった久米弘行や森春吉が日本人の英語教師として慶応義塾から派遣されている(慶応義塾, 1969)。また、奥宮愷斎<sup>5</sup>の甥、奥宮正親の回顧談によると「私の(藩校致道館への)入学は、明治3(1870)年、13歳のときであって、当時使われていた教科書は、クーリッチ歴史、馬來(パーレー)萬國史、カケンブス米國史、チャンベリーダー、ミチエール地理書、ワワイト萬國史、カノーの物理学であった」と追懐している(福島・吉野, 1929)。このことから『ミッチェル氏地理書』が教科書として使用されていたことが確認される。その後、明治7(1874)年4月開校の立志学舎においても、慶応義塾の英学教師が迎えられている。ただし、立志学舎では、『ミッチェル氏地理書』は教科書として採用されてなく、法学・歴史・経済書の原書が中心で

<sup>5</sup> 幕末・明治維新期の土佐藩随一といわれた陽明学者・儒学者であり、明治政府の教部省に出仕、大教院・大講義などを歴任した。







写真8 Mitchell's New Primary Geography の  
翻刻版 (岡島, 1889, p. 79) より

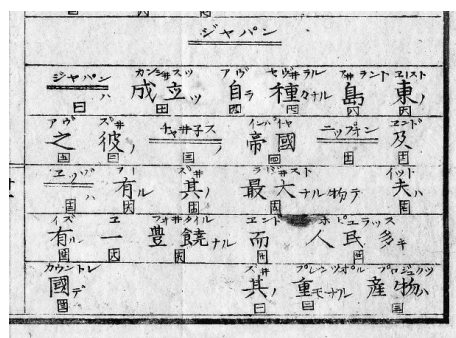


写真9『密都爾氏地理書直譯 下』(卅一丁)

翻刻版では Hondo という英語が用いられており、ミッチェルがどのような経緯で情報を得て改訂したのか興味深いところである。

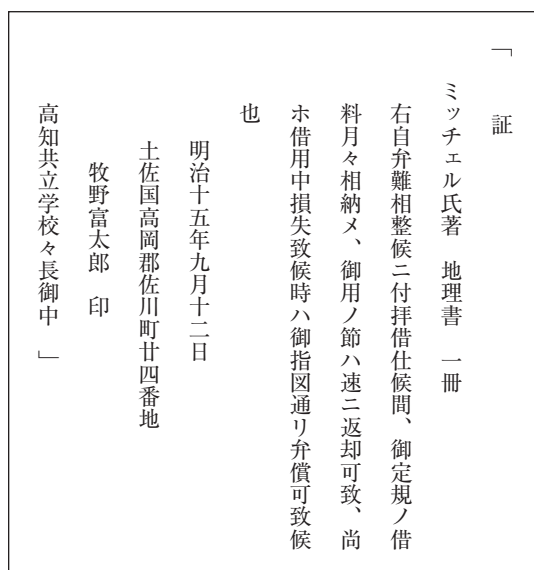
多くの情報を容易に入手できる現在と全く異なる明治初期において、当時の日本人が、日本という国の姿を客観的に認識できる情報源の一つであったことは間違いない。

#### 1. 4. 高知における『ミッチェル氏地理書』の原書の価値

明治初期における原書は、輸入品でもあり貴重で大変高価であった<sup>6</sup>。高知共立学校の資料に牧野富太郎の同書の借用書がある。

借用書には、「自ら購入することが出来ないので、拝借し規定の借料を月々納め、必要な時には速やかに返します。なお、借用中、紛失しましたらご指示のとおり弁償します」という旨の内容が記載されている。

明治15(1882)年の高知共立学校『生徒心得』には、「第7条 凡ソ借用ノ書籍、若クハ校ノ物品ヲ毀損、又ハ散失セシムル者アルトキハ、之ヲ弁償セシ



『高知共立学校資料集』(土佐女子高等学校, 1992, p. 72) より筆者転記

<sup>6</sup> 福沢がニューヨークで購入した書籍等は約800冊で3000両、今日の1600万円に相当する金額である (金子, 1979)。

ムヘシ。第13条 授業料ハ金三拾円トスル。毎月ノ末、翌月分ヲ事務局ヘ納ムヘシ。但、書籍見料モ同時ニ納出スルモノトスル」と記載されている（土佐女子高等学校, 1992, p. 434）。つまり、第7条は、「借用中の書籍を紛失した場合は、弁償しなければならない」、第13条では「書籍の借用の際は、授業料と一緒に見料を月末に納入すること」という内容である。書籍見料については、明治16(1883)年の『高知共立学校諸規則』で改正され、第12条で「課業書ハ勿論生徒ノ自弁タリト雖、時宜ニ由リ貸付スル事アルヘシ。但シ、貸付ノ書籍ハ毎月見料トシテ現価百分ノ二ヲ納メシム」と定められている（同書, p. 464）。内容は、「教科書は勿論、生徒の自弁であるが時により貸付することもある。ただし、貸付の書籍は、毎月見料として現価の2%を納めなければならない」とあり、いかに高価で貴重なものであったのか確認できる資料である。

上記のような状況もあり、翻訳書が多く出されるようになる。特に、明治5(1872)年頃より年を追って急激に増加する（福田, 2008）。この直訳本である『密都爾氏地理書直譯』もその中の一つである。また、土佐女子高等学校保管の「高知共立学校蔵書」の中には、「立志学舎」の蔵書印を抹消し、「高知共立学校」の蔵書印が押されているものが数点あり、貴重な原書が大切に引き継がれてきたことが推し量られる（写真10 & 11 参照）。

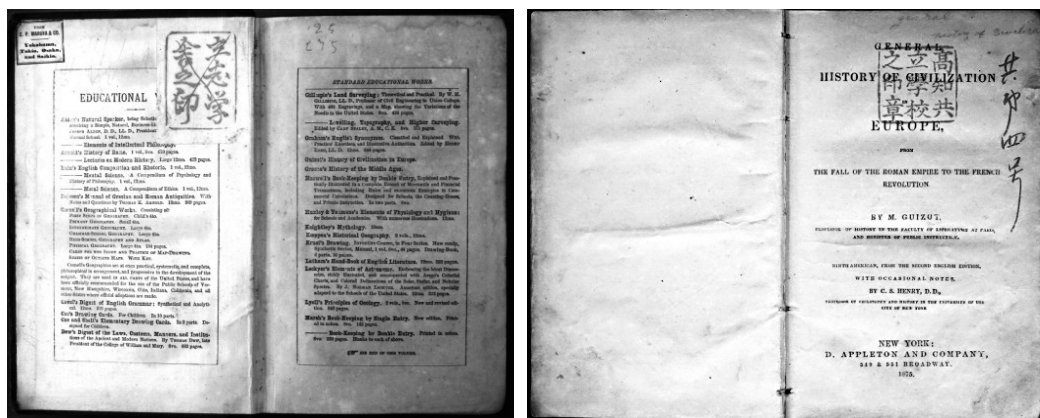


写真10 & 11 *General History of Civilization in Europe*（土佐女子高等学校所蔵）

## 2. 『密都爾氏地理書直譯』—その注目すべき「例言」

本章では、『密都爾氏地理書直譯 上』にある「例言」の記載事項を詳説する。

### 2.1. 訳語

「例言」の冒頭に「此直訳は、僻士遐陬師授に乏しき学童に資する書なれば、大抵俗語を用い、勉めて簡易を旨とし、加うるに吾国字を以て彼の国音を載す」とある。つま

り、「いまだ生の英語を聞いたことがなく、先生にも恵まれていない地方の学童に、簡易な言葉で逐語訳をし、その上、単語一つひとつにカタカナで発音表記を施し、読み方も加えたものである」と説明している。日本語に訳す際の語順も数字で振られており、「例言」にも訳されているように「音学及び訳読一挙兩得に便ならしむ」ものであった。

『密都爾氏地理書直譯』には、原書の英文は全く取り上げられておらず、そのカタカナ読みと訳語のみが記載されている。当時、学習者は原文と対比しながら講読していたと考えられる。たとえば、原書の“The earth revolves around the sun.”という英文は、『密都爾氏地理書直譯』では次のように訳されている（写真12参照）。

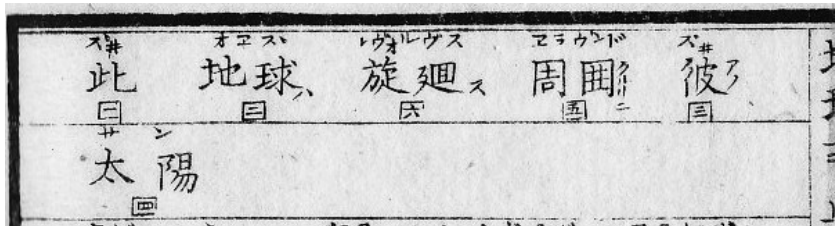


写真12 『密都爾氏地理書直譯 上』（二丁）

同じく“How is the water divided?”は、以下の通りである（写真13参照）。この場合の water は水域の意味であると考えられる。



写真13 『密都爾氏地理書直譯 上』（二丁）

『薩摩辞書』（1869年）<sup>7</sup>によると、earth「地球」、revolve「旋回スル」、around「周囲ニ」、sun「太陽」、とあり、訳語の多くは当時広く流通していた『薩摩辞書』に拠っていることが考えられる。訳語の下に漢数字の序数が振られており、その順番に追いかけていくと英文の訳となる。これは、漢学の要素が強く影響しており、当時の直訳本のほとんどは、このスタイルである。

当時、訳語で苦労しているのは『密都爾氏地理書直譯』だけでない。たとえば、中村正直がJ. S. ミル<sup>8</sup>の『自由之理』<sup>9</sup>を明治4（1871）年に翻訳し、翌年刊行している。その

<sup>7</sup> 文久2（1862）年に『英和对訳袖珍辞書』が出版され、慶応2（1866）年に『改正増補英和对訳袖珍辞書』として再販されている。その後、同書は明治2（1869）年に薩摩藩の学生によって上海で『改正増補 和訳英辞書』として印刷され、それが『薩摩辞書』と呼ばれた。（監修者である島正三の『薩摩辞書』解題より）

<sup>8</sup> John Stuart Mill（1806-1873）はイギリスの哲学者、経済学者、社会学者である。

<sup>9</sup> 翻訳本では、弥爾（ミル）著で、中村敬太郎訳となっている。中村敬太郎とは中村正直のことである。



序論は写真14の通りである。

細字部分は、いまだ日本に存在しない「自由」という思想概念を中村が説明している箇所である。訳語の定まっていないうものもあり、後世の人の改正を待つと付記している<sup>10</sup>。それに比べ、地理書は地球上に存在する事物を表現したものであり、比較的訳出が容易であったと思われる。それでも、『密都爾氏地理書直譯 上』の中で、政治体制が論じられている箇所は、republic も the United States も「合衆国」と訳すなど簡略化しているところは、難しい一面であったと容易に推測できる<sup>11</sup>。「例言」でも「大抵俗語を用い」とある。

## 2.2. 発音

「例言」は続いて「而して彼の国音は、我文字を以て尽すこと能はざる者往々有り」と

述べる。つまり、「わが国の文字だけでは、英語の発音をすべて表記することは困難である」と言及している。それに対して、同時期発刊の『五十韻之原由』(加藤, 1873)の序言には、「此の五十韻といふは我皇国の人の自然の音にて萬言此五十韻より生し活用自在にし則正しきこと他国の言語に比較すべきものなし」とある。つまり、「世界中の言葉はこの五十韻から生じており、世界にも比類のない優れたものである」と豪語している。

英語の発音をカタカナで表記する起源は、『日本英學史の研究』(豊田, 1939, p. 5)によれば「(文化8年の春に出来た)『<sup>アングレリヤ</sup>諸厄利亞國語和解』(写本)十卷である。是は英語の単語と会話に片仮名で発音を記し、日本語訳を附したものであって、我が国で出来た最初の纏った英学書である」とあるように、文化8(1811)年である。カタカナ表記の一例(同書, p. 6)は次のとおりである。

メイ デール フリント アイ ヘビ モツ ジョイト シー ユー  
My dear friend, I have much joy to see you.  
我信友我レ汝ニ謁スル事を甚喜悅す。

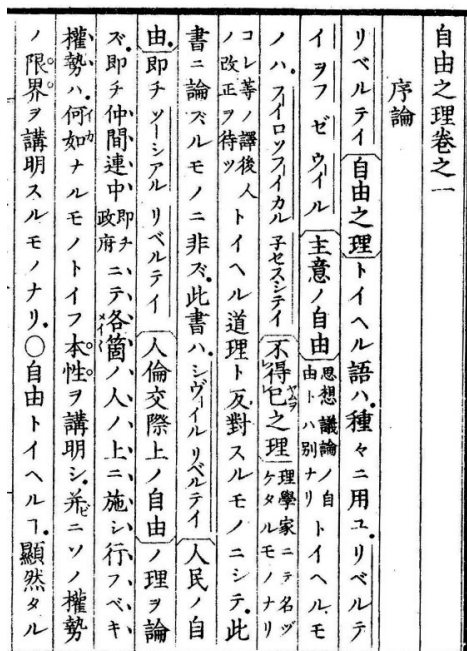


写真14 『自由之理』(国立国会図書館所蔵 デジタルライブラリより)

<sup>10</sup> liberty は『薩摩辞書』では「自由、掛り合ナキ事」、philosophy は「理学」、後世に「哲学」となった。

<sup>11</sup> 『薩摩辞書』では、republic は「共和政治」、United は「結合う」、States は「国」となっている。



下記の写真15は『密都爾氏地理書直譯』の「例言」であり、縦書きにも関わらず、左から右へ読むようになっている。次項では、発音方法を詳説する。

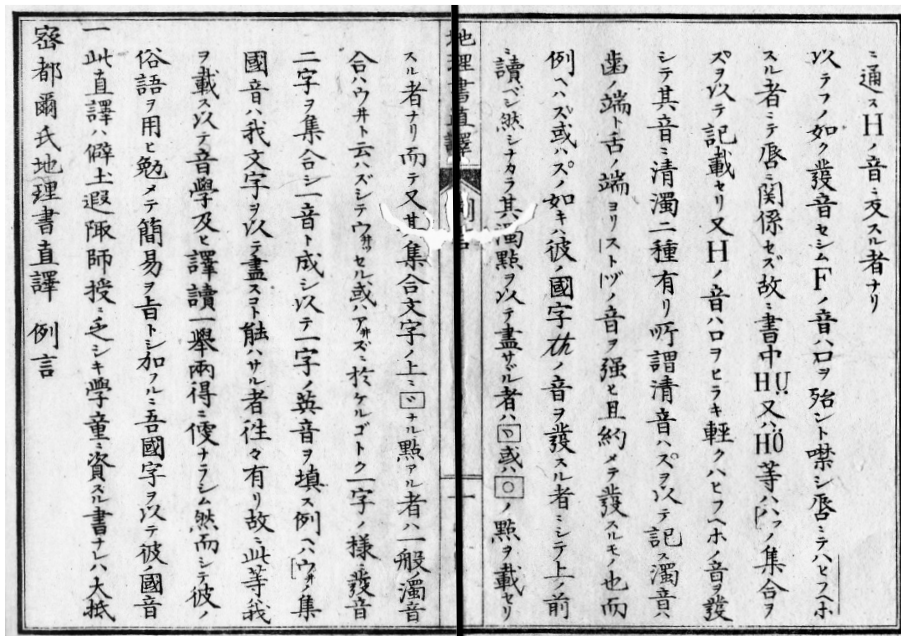


写真15 『密都爾氏地理書直譯 上』「例言」(一丁)より

### 2.2.1 2字の集合音

2文字の集合音を、日本古来の五十韻と比較しながら検討していく。「例言」では「故に此などは、我二字を集合し一音と成し、以て一字の英音を填す。例へばウ井の集合は、ウ井と云わずしてウ井ッセル、或はア井ズに於けるごとく、一字の様に発音する者なり」と説明している。『密都爾氏地理書直譯』では、we は「ウ井ー」、island は「ア井ランド」と表記されている。この小さな「井」は、子音に続く母音のiを表している。前記で引用した、『自由之理』序論でも、will のカタカナ表記が、ウとイの間の右傍らに傍線が引かれている。これも、wの子音にiの母音が続くという意味で使われていると考えられる。しかし、後にこれを翻刻した『明治文化全集 第5巻』中の「自由民権篇」(明治文化研究会, 1927, p. 7) では、翻刻する際、長音と間違い、「ウーイル」としている。

古来、日本でも音の子音と母音に分ける考え方が存在していた。馬場(1993, pp. 154-6)によれば、寛治7(1093)年に書かれた『反音作法』には「言ハユル反音トハ、二字相ヒ合シテ一字ノ音ヲ成スナリ。上字ニ於テ初ノ声ヲ取り、下字ニ於テ終音ヲ取ル」とある。ワ行は、「○ウア 井ウイ ウウ エウエ ヲウオ(次頁写真16参照)」であり、原文では縦書きになっているので、「井」はウが上字でイが下字となる。つまり、「井」は子音がウ(w)、母音がイ(i)で、ウの唇の形からイと発するということである。



写真16 『五十音図の話』(馬淵, 1993, p. 156)

これを継承し明治6(1873)年、2.2で取り上げた『五十韻之原由』(加藤, 1873)には、ワ行の発音に関して、以下のような記述がある(写真17参照)。

わゐうゑの五音ハ、うゑの二音つつまりて  
わとなり、うゑの二音約りてゑと成、うゑの  
二字つつまりてうとなり、うゑの二音約りて  
ゑとなり、うゑの二音つつまりてゑとなるも  
のなり。(略)今ハその差別なきか如くなれ  
と詞の活用にいたりては、今といへとも紛る  
ることなし(52~53丁)。

『五十韻之原由』における、ワ行の発音に関して、「ワ行の「ゐ」は、ウとイ、「う」はウとウ、「ゑ」はウとエ、「を」はウとオのそれぞれ縮まった音で、「あ」行の音とは異なるものである。今はその区別がないが、詞の活用においては区別されている」と説明している。五十音図のローマ字表記で、「ワ」行は wa, wi, wu, we, wo となるが、現在、音で残っているのは wa のみである。

明治6(1873)年には、上記に挙げた『反音作法』

の五十音図のような古文獻に依拠した歴史的仮名遣が小学教科書に採用され、これ以降学校教育によって普及させようと企図される。高知県教育史編集委員会の『近代高知県教育史』(1964, p. 302)には、「五十音中ノ字ヲ適宜ニ塗板ニ書シ読セシム(中略)字ヲ書シメ先自ラ呼ヒテ其区別ヲ示シ」とある。つまり「五十音の中の一文字を板書し、その音を発音させ、また、文字を書かせその音を先生が発音し、その区別を示す」とあるよ

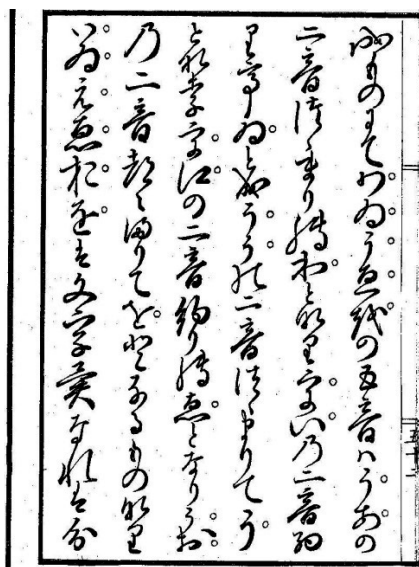


写真17 『五十韻之原由』(国立国会図書館所蔵 デジタルライブラリより)

うに、それぞれの音の区別を教えていたようである。明治初期当時の小学教科書で指導されていた五十音図は以下のとおりである（写真18参照）。

ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
	ヰ	リ	レ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
	于	ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
	エ	レ	ヱ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ

写真18 『五十音図の話』図2の「明治6年5月 文部省編纂  
小学教授書」より（馬淵, 1993, p. 18）

中濱万次郎が安政6（1859）年に編んだ『英米対話捷徑』に、well は「ウワエル、ウハヘル、ワイル」とカタカナが振られている（乾, 2010）。これをそのまま u-wa-e-ru, u-ha-he-ru と読んでは明らかに韻が多すぎる。「ウワ」あるいは「ウハ」は w の子音を表すものと考えられる。ワとハの相違は、ハ行がワ行に変化するハ行転呼が混在しているものと思われる。正式な日本語教育を受けず、言葉も忘れていた万次郎が、帰国後、日本語の勉強をする際、五十音を学んだことは想像に難くない。しかし、ワ行の「エ」が we と発音されていれば、「エル」で済んだはずであるが、万次郎の表記が苦心した跡をみるにつけ、すでに「エ」音は存在していなかったという他はない。「例言」も we を「ウヰー」とことわっている。本来であれば、ワ行の「ヰ」である「ヰ」だけでよいはずである。

『密都爾氏地理書直譯』の集合文字に関する記述に、「又、其集合文字の上に□なる点ある者は、一般の濁音に読べし」とある。「ヴィ」などのことであるが、これについては「B と V」の項に譲る。

## 2.2.2 th の発音

th の発音に関しては、「其濁点を以て尽さざる者は $\text{D}$ 或は $\text{O}$ の点を載せり<sup>12</sup>。例へば、ス<sup>°</sup>の或はの如きは、彼の国字 th の音を発する者にして、上の前歯の端ト舌の端よりスとヅの音を強く、且約めて発するもの也。而して其音に清濁二種有り。所謂、清音はス<sup>°</sup><sup>13</sup>を以て記す。濁音はスに半 $\bigcirc$ <sup>14</sup>、を以て記載せり」とある。つまり、発音方法では

<sup>12</sup>  $\text{D}$ は $\text{D}$ を、 $\text{O}$ は $\text{O}$ の表記を示す。

<sup>13</sup>  $\text{S}^\circ$ の表記を示す。

<sup>14</sup>  $\text{S}^\circ$ の表記を示す。

「ス(に半○)或いはス°とあるのは、英語の th の音を発音する際に使い、上の前歯の端と舌の端でもってスとヅの音を強く、かつ縮めて発音するものである。しかしその音には清濁の二種が有る。清音はス°を以て記し、濁音は、スに半○、をつけて記載した」と説明している。また、three は th の清音を表す「ス°」に続き「レー」とある<sup>15</sup>。書中には、together をトゲサ(に半○)アーと仮名を振っている。th は『密都爾氏地理書直譯』でも記述されているように日本語にはない音であり、この説明だけで正確な発音をすることは極めて難しいと考えられる。しかし、「例言」の指示に従って読むことができれば、ある程度は発音することが可能であったと推測される。

これが広く普及していたならば、慶応義塾で学んだ憲政の神様、尾崎行雄の「意味だけがわかれば善いという主義で、ことばの発音などにはトンと頓着しなかったのです。たとえば、あの the の字ですナ。あれは今日でも笑い草になっているのですが、ジとかザとか発音せずに、トヒーと発音したようなもので、それは随分へんてこな発音をしたものです」という話はなかったのかもしれない(惣郷, 1979, p. 189)。

### 2.2.3 F の発音

F の発音に関しては、「F の音は口を殆んど噤じ唇にてハヒフヘホに通ず、H の音に反する者なり」と記載がある。文字通り読めば、「ハヒフヘホは、口を閉じたまま唇で発音していたので F の音と同じであり、口を開けて発音する H の音とは異なる」と明言している。書中の F 音の箇所は「フ」の後に小さな「アヰウエオ」をつけ、H 音と区別している。ファ、フヰ、フウ、フヱ、フォは、唇を閉じたフから発音することになる。『密都爾氏地理書直譯』では、surface を「ソエフェス」、form を「フオーム」と記載し、明らかに F 音を意識していることになる。

『英米対話捷徑』では family は「ファミレ」、『薩摩辭書』は「ファミリー」とあるが、発音の方法は説明がない。また、五十音図にはない音のため、口を明けたままのファ・フィ・フウ・フエ・フォなのか、閉じ唇のフから発音することを示しているのか断定は難しい。『薩摩辭書』で coffee は読みが「コッフィー」、訳は「珈琲」にカッヒーとカナが振られている。前述の『反音作法』では、「ヒ」は「フ」と「イ」と分解されており、古来の名残であるとすれば興味深いと考えられる。

### 2.2.4 H の発音

H の発音に関しては、「H の音は口をひらき、軽くハヒフヘホの音を発する者にて、唇に関係せず、故に書中 HU 又は HÖ などは [ハフ] の集合を以てフの如く発音せしむ」とある。つまり、H の発音は、「口を開いたまま、軽くハヒフヘホと発音するもので、唇に関係ない」と説明している。中世から近世の日本語のハ行の発音は現在のハヒフヘ

<sup>15</sup> th の発音について『英米対話捷徑』では、three は「スリー」、the はズイ、『薩摩辭書』では、それぞれ「スリー」と「ゼ」とある。



ホと違っていたことは知られている。たとえば、森田 (1977年, p. 265) によると「後柏原天皇の『なぞだて』(1516年)に、はゝには二たべあひたれどもちゝには一どもあはずとあるのは、「母」を発音する時は唇が二度合うけれども、「父」の時は一度も合わない意である。それは「は」が両唇音であったことを示し、ローマ字で fafa, faua と写すのと符号するのである」とある。室町時代のキリシタン資料には、ハ行を fa, fi, fu, fe, fo で写しているものがある (同書, p. 264)。

天保元(1830)年に編纂された *An English and Japanese, and Japanese and English Vocabulary* (Medhurst, 1830) では、Sun は Fi で「ヒ」、Sun-shine は Fi-na-ta で「ヒナタ」と訳され、Sun-rise は A-sa-hi で「アサヒ」、Star は Ho-si で「ホシ」とある (豊田, 1939, pp. 53-4)。ここでは、ハ行に関して、F と H の混同が見られる。ただし、豊田 (同書, p. 54) は、編者のイギリス人宣教師であった Medhurst は、来日の経験も、日本人と話したこともないが、日本からもたらされた漢字交じりの書物を参考にし、また、自ら漢字が読めたことにより、この辞書を編纂したと述べている。実際に日本人から直接発音を聞いたわけではないのである。この辞書が、安政 4 (1857) 年から文久 3 (1863) 年にかけて『英語箋 一名米語箋』として翻刻されているが、上述の F、H はそのまま踏襲されている (写真19参照)。

VOCABULARY		
ENGLISH AND JAPANESE		
<i>1 universe</i>		
<i>1 celestial objects</i>		
heaven	ten	天
sky	so-ea	空
firmament	woo-so-ea	空
light	fi-kae	光
darkness	hfoo-en-va	暗
shadow	hage	影
sun	fi	日
do	nitt-ein	日輪
sun-rise	a-sa-bi	日昇
sun-shine	fi-na-ta	日光
moon	ts'hi	月
moon-shine	ts'hi-go	月光
new moon	sin-getsu	新月
full moon	man-getsu	満月
eclipse, sun	nus-si-jokt	日食
to moon	kano-si-jokt	月食
star	ho-si	星

写真19 『日本英学史の研究』(豊田, 1939, p. 54)

幕末に通訳として来日したイギリス人アーネスト・サトウ (Ernest Satow) が著した論文 *On the Transliteration of the Japanese Syllabary*<sup>16</sup> に興味深い著述がある。そこには、ハ行の発音が西日本と奥州では限りなく F 音に近いと書かれている。サトウは、慶応 3 (1867) 年には、英国公使パークスに随行し土佐を訪問するなど、通訳として日本各地を転々とし、その地方によって発音の違いがあることに注目した。

以上のことより『密都爾氏地理書直譯』の訳者は、西日本か奥州の出身であった可能性が考えられる。そして、HŪまたはHÖの表記があることより、ウェブスターのスペリングブックの影響も見られる。日本では『ウェブストル氏スペリングブック』と呼ばれ、翻刻版なども出ている。

### 2.2.5 B と V の区別

B と V の発音に関しては、「B と V は大凡、<sup>おおよそ</sup>似て同からず。B はバビズベボに通ず。V は上の歯と下唇を合せてハヒフヘホ ワ井ウエオの間の音を唱ふるものなり。故にヴァヴィヴヅ<sup>ヅ</sup>と書中に記するなり」とある (写真20参照)。つまり、「B と V は、似ているが同じではない。B は日本語のバビズベボの音と同じで、V は上の歯と下唇を合せてハヒフヘホ ワ井ウエオの間の音を発音するものである。故にヴァヴィヴヅ<sup>ヅ</sup>と書中に記すものである」と記載されている。

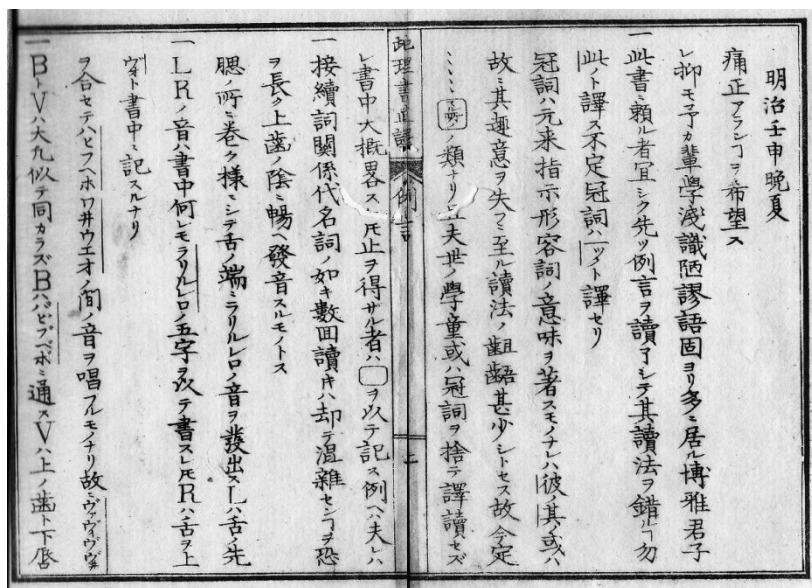


写真20 『密都爾氏地理書直譯 上』「例言」(二丁)より

<sup>16</sup> Asiatic society of Japan (2011) の *Transactions of the Asiatic Society of Japan, Volume 7* の中にアーネスト・サトウの論文が掲載されている。*Transactions of the Asiatic Society of Japan* は、明治12(1879)年に初版本が出版され、その後復刻版が Asiatic society of Japan により出版されている。

バビブベボは、唇を閉じて発音するハ行の濁音であるので、五十音図からすれば、整合性がとれていると考えられる。なお、2.1で触れた How is the water divided? の divided は「デヴァ井テット」と記されている。

この「ヴァ」にみられるような「ウ」に濁点を打つ方法は、福澤諭吉(1834-1901)が、さきがけであることは知られている。『福澤諭吉全集 第一巻』「緒言」(慶応義塾, 1958, pp. 24-5)によると、以下のような記載がある。

安政五年余が江戸<sup>きた</sup>に來りて初めて出版<sup>はじ</sup>したるは華英通語<sup>しゅつぱん</sup>なり是れは翻譯<sup>くわえいつう</sup>と云ふ可<sup>こ</sup>き程<sup>ほんやく</sup>のものにも非ず原書<sup>い</sup>の横文字<sup>たゞ</sup>に仮名<sup>たゞ</sup>を附けたるまでにして事固より易し唯原書<sup>き</sup>のVの字<sup>せいおん</sup>を正音<sup>こともと</sup>に近からしめんと欲し試<sup>たゞ</sup>にウワの仮名<sup>こゝろみ</sup>に濁點<sup>かな</sup>を附けてヅと記したるは當時<sup>だくてん</sup>思付<sup>しんあん</sup>の新案<sup>たうじ</sup>と云ふ可きのみ。

内容は「安政五年に私が江戸に来て初めて出版したのは華英通語である。これは、翻訳という程のものではない。原書の横文字に仮名をつけたのみで簡易なものである。ただし、原書のVの字を正しい音に近づけようと試しにウワの仮名に濁点をつけてヅと記したのは、当時の思いつきというべきである」とあり、Vの音をいかに発音すれば正確を期すことができるのか工夫している様子が推測できる。また、同書の「増訂華英通語」の凡例(p. 70)に「ウワに濁点を附する者は、ブバとウワとの間の音なり」とあるが、『密都爾氏地理書直譯』には、ワに濁点を付したものはなく、一般的とはならなかったと考えられる。

## 2.2.6 L と R の区別

L と R の発音に関しては、「L、R の音は、書中何れもラリルレロの五字を以て書すれども、R は舌を上臈<sup>あご</sup>の所に巻く様にして舌の端にラリルレロの音を発出す。L は舌の先を長く上歯の陰に暢へ、発音するものとす」とある。つまり、「L、R の音は、どちらもラリルレロの五字で表記したが、R は舌を上あごの所に巻く様にして舌の端でラリルレロの音を発音する。L は舌の先を長く上の歯の裏に伸ばし、発音する」と記載されている。『密都爾氏地理書直譯』では、カナ表記の上での区別はされず、カナ文字の不足を補うことはできなかったようである。th の発音表記と同様、ラに○を附すこともできたと考えられるが、そのような表記はされていない。また、明治15(1882)年の『ウェブストル氏スペリングかなつき』では、heroism という語に対して「ヒルヲイズム」と小さいヲを入れ区別しているものは見られる(井村, 2003, p. 44, p. 322)。前述のサトウの論文では、ラ行は r よりも l により近いと論じている。

以上が、「例言」の記載事項より考察した発音に関する記述である。訳者の川村秀二と讃井逸三は明治初期においてどのようにこれらを習得したのであろうか。慶応義塾の塾生の名簿である『慶応義塾入社帳』には、二人の名前は見出せなかった。ジョン万次

郎の在籍した、東京大学の前身、大学南校にもその名は、見出し得なかった。

## おわりに

本稿では、『ミッチェル氏地理書』が我が国において教科書として広く普及していたことを概観した。現在とは異なり、世界の様子を知り得る情報源が限られている当時において、『ミッチェル氏地理書』が貴重なものであり、多くのことを学ぶことができた教科書としての意義は大きいと考える。また、多くの若者たちが、豊富な挿絵を通して、遠い異国に思いを巡らせ、何が書かれているのか興味津々で学んだことは容易に想像できる。

『密都爾氏地理書直譯』にある「例言」の記載事項をもとに、当時の英語に振られたカタカナ表記の音が現在と同じであったのかを検証した。「例言」の最後(二丁)に「此書に頼る者、宜しく先ず、例言を讀了して其讀法を錯る事勿れ。抑も予が輩、学淺識陋、謬語、固より多に居る。博雅君子痛正あらん事を希望す」とある。つまり、「この本を学ぶものは、先ず「例言」を読み終えてから、その読み方を誤ることのないようにしなさい。自分も学識浅く、誤りも多くある。優秀な方は、その誤りを正して欲しい」と結んでいる。確かに、定冠詞の the は、後に続く単語の発音が何であれ、すべて「ス(半マル)井」で読まれるなど間違いがみられる。しかし、140年以上も前に書かれたことを考慮すると、R と L の発音など、現在でも日本人が区別することが難しい音にも言及されるなどのその先進性や、本来の音に近づけるようにと、発音のカタカナ表記に創意工夫が加えられるなど思考の柔軟性には驚かされる。また、「例言」では、訳者が説明するハ行は、閉じた唇により発音すると言及している。そのことより、日本古来の発音が残っている地域があったことが推測できる。そして、このことを立証してくれたのは、アーネスト・サトウの論文の内容であった。サトウは、西日本と東北において、ハ行が F 音に近いと論じている。以上のように、「例言」を読み解くことで、多くの示唆が含まれており意義深いと考える。

## 謝辞

本論文への資料提供、および資料の訳に際しては、今井章博氏にご協力を頂きました。ここに記して感謝の意を表します。

## 引用文献

- 乾高氏 (2010). 『ジョン万次郎の英会話』 J リサーチ出版.  
井村元道 (2003). 『日本の英語教育200年』 大修館書店.



- 大村喜吉・高梨健吉・出来成訓(編)(1980).『英語教育史資料 3 英語教科書の変遷』東京法令.
- 岡島幸次郎(1889). Mitchell's New Primary Geography 翻刻版
- 加藤裕一(1873).『五十韻之原由』
- (国立国会図書館 <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/862284>) (2013. 10. 30. 入手)
- 金子宏二(1979).「『藩養学養賢堂蔵洋書目録』について－慶応三年福沢諭吉将来本－」『早稲田大学図書館紀要』第20号, pp. 98-113.
- 慶応義塾(編)(1969).「付録14 明治23年以前における慶応義塾出身教職員の分布状況」『慶応義塾百年史付録』(p. 184). 慶応義塾大学出版会.
- 高知県教育史編集委員会(1964).『近代高知県教育史』高知県教育研究所.
- 讃井逸三・川村秀二(1872).『密都爾氏地理書直譯 上・中・下』村上勘兵衛.
- 島正三(監修)(1968).『初版本 薩摩辞書 明治二年改正増補和訳英辞書 An English-Japanese Dictionary』桜楓社.
- 惣郷正明(1979).「明治初年の英和辞書」日本英学史学会編『英語事始』(pp. 195-9). 日本ブルタニカ株式会社.
- 外崎光広(1992).『土佐自由民権運動史』財団法人高知市文化振興事業団.
- 土佐女子高等学校(編)(1992).『高知共立学校資料集』学校法人土佐女子学園.
- 豊田實(1939).『日本英學史の研究』岩波書店.
- 中村正直(1872).『自由之理』木平謙一郎.
- (国立国会図書館 <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/783198/12>) (2013. 10. 30. 入手)
- 日本の英学100年編集部(1968).『日本の英学100年 明治編』研究社.
- 福沢諭吉(1958).『福沢諭吉全集 第1巻』岩波書店.
- 福島成行・吉野作造(編)(1929).「高知藩に招聘の外国人と学館」『明治文化』第5巻第10号, (pp. 20-3). 日本評論社.
- 福田真人(2008)「明治翻訳語のおもしろさ」『言語文化研究叢書』(pp. 133-45). 名古屋大学大学院国際言語文化研究科.
- 馬淵和夫(1993).『五十音図の話』大修館書店.
- 明治文化研究会(編)(1927).『明治文化全集 第五巻 自由民権篇』日本評論社.
- 森田武(1977).「音韻の変遷 (3)」『岩波講座日本語 5 音韻』(pp. 253-80). 岩波書店.
- Satow, E. B. A. (2011). On the Transliteration of the Japanese Syllabary. In Asiatic society of Japan (Ed.), *Transactions of the Asiatic Society of Japan*, 7 (pp. 226-66). Ulan Press.
- Past Present Gallery (<http://www.pastpresent.com/storofmitmap.html> “The Story of Mitchell Maps”) (2013. 12. 29. 入手)

